

受験番号	志望学科・コース
	学科
	コース

[物理-1]

問題1

下図のように、質量 M 、長さ L の密度一様な剛体棒がある。この棒の重心 G から距離 b ($b > 0$) の位置にある軸 O を固定軸として棒は自由に回転できる。重力加速度の大きさを g とする。軸と棒の間の摩擦力、軸と棒の太さはいずれも無視できるとする。以下の問に答えよ。

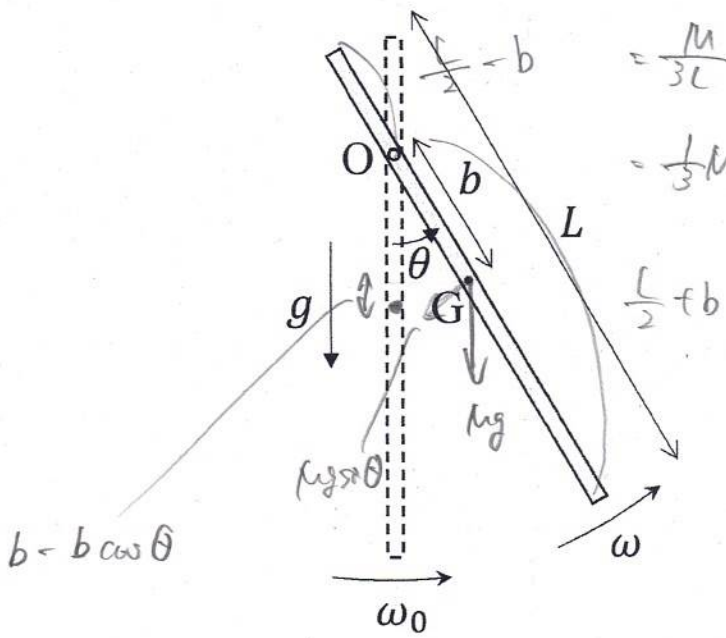
- (1) 軸 O のまわりの棒の慣性モーメントを I とする。 I を L, M, b を用いて示せ。
- (2) 棒が鉛直に垂れ下がっている状態（下図の破線）で、棒に大きさ ω_0 の角速度を与えた。棒が下向き鉛直線から角度 θ をなすときの角速度の大きさ ω を示せ。
- (3) 棒が振動せずに回転するために ω_0 が満たすべき条件式を示せ。

以降は、棒を軸 O のまわりに微小振動させた場合について考える。

- (4) この微小振動の角振動数 ω_n を示せ。
- (5) この角振動数 ω_n を最大とする b と、そのときの角振動数 ω_{max} をそれぞれ示せ。

$$\int_{-(\frac{L}{2}-b)}^{\frac{L}{2}+b} \frac{M}{L} r^2 dr$$
$$= \frac{M}{L} \left[\frac{r^3}{3} \right]_{-(\frac{L}{2}-b)}^{\frac{L}{2}+b}$$

$$= \frac{LM}{3L} \cdot \left(\left(\frac{L}{2} + b \right)^3 + \left(\frac{L}{2} - b \right)^3 \right)$$
$$= \frac{M}{3L} \cdot (L) \left(\frac{L^3}{4} + Lb^2 + b^3 - \frac{L^3}{4} + Lb^2 - b^3 \right)$$
$$= \frac{1}{3} M \left(\frac{1}{4} L^3 + Lb^2 \right) = \frac{1}{12} M L^2 + M b^2$$



1.

(1)

重心からの慣性モーメント I_G は

$$I_G = \int_{-\frac{L}{2}}^{\frac{L}{2}} \frac{M}{L} r^2 dr = \frac{M}{L} \cdot 2 \left[\frac{r^3}{3} \right]_0^{\frac{L}{2}} = \frac{M}{L} \cdot 2 \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{L^3}{8} = \frac{1}{12} ML^2$$

平行軸の定理より

$$I = I_G + Mb^2 = \frac{1}{12} ML^2 + Mb^2$$

(2)

E保存より

$$\frac{1}{2} I \omega_0^2 = Mgb(1 - \cos \theta) + \frac{1}{2} I \omega^2$$

$$\omega^2 = \omega_0^2 - \frac{2Mgb(1 - \cos \theta)}{I} = \omega_0^2 - \frac{2Mgb(1 - \cos \theta)}{\frac{1}{12} ML^2 + Mb^2}$$

$$= \omega_0^2 - \frac{24gb(1 - \cos \theta)}{L^2 + 12b^2}$$

$$\therefore \omega = \sqrt{\omega_0^2 - \frac{24gb(1 - \cos \theta)}{L^2 + 12b^2}}$$

(3)

回転が止まる条件より $\omega = 0$ のとき, $\theta = \pi$ のとき $\omega = 0$

$$\therefore \omega_0^2 - \frac{24gb \cdot 2}{L^2 + 12b^2} = 0$$

$$48 = 16 \times 3$$

$$\omega_0^2 = \frac{48gb}{L^2 + 12b^2}$$

$$\therefore \omega_0 = 4 \sqrt{\frac{3gb}{L^2 + 12b^2}}$$

Lは0より, ω_0 の条件は

$$\omega_0 \geq 4 \sqrt{\frac{3gb}{L^2 + 12b^2}}$$

(4)

回転運動の方程式は、 θ に対する運動方程式

$$I\ddot{\theta} = -Mg \sin\theta \cdot b \approx -Mgb \cdot \theta$$

$$\ddot{\theta} = -\frac{Mgb}{I} \theta = -\frac{Mgb}{\frac{1}{2}ML^2 + Mb^2} \theta = -\frac{12gb}{L^2 + 12b^2} \theta$$

$$\therefore \omega_n = \sqrt{\frac{12gb}{L^2 + 12b^2}}$$

$$(5) f(b) = \frac{12gb}{L^2 + 12b^2}$$

この最大値は、 ω_n の最大値に一致する。

$$f'(b) = \frac{12g(L^2 + 12b^2) - 24b \cdot 12gb}{(L^2 + 12b^2)^2} = 0$$

$$\therefore L^2 + 12b^2 - 24b^2 = 0$$

$$12b^2 = L^2$$

$$\therefore b = \frac{L}{2\sqrt{3}}$$

すなわち、 $b = \frac{L}{2\sqrt{3}}$ のとき ω_n は最大。

$$\begin{aligned} \therefore \omega_{\max} &= \sqrt{\frac{12g \cdot \frac{L}{2\sqrt{3}}}{L^2 + L^2}} = \sqrt{\frac{\frac{6}{\sqrt{3}}g}{2L^2}} = \sqrt{\frac{6g}{2\sqrt{3}L}} \\ &= \sqrt{\frac{\sqrt{3}g}{L}} \end{aligned}$$

$$\sqrt{\frac{L^2}{12}} = \frac{L}{2\sqrt{3}}$$

$$\frac{\sqrt{3}g}{2\sqrt{3}L} = \frac{\sqrt{3}g}{L}$$

2023年度 大阪大学基礎工学部編入学試験

[物理] 試験問題

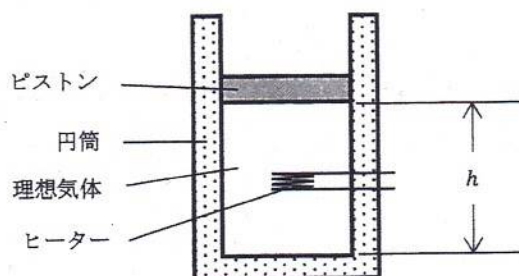
受験番号	志望学科・コース
	学科
	コース

[物理-3]

問題3

下図のように、大気中に、底のある円筒を鉛直に置き、 n モルの理想気体を入れてピストンで塞いである。円筒内部には体積が無視できるヒーターが備え付けられている。円筒とピストンは断熱材で作られており、大気など外部とは断熱されている。円筒の内側の底面の面積を S 、ピストンの重さを M 、大気圧を P_0 、重力加速度を g 、気体定数を R 、理想気体の定圧モル比熱、定積モル比熱をそれぞれ C_p 、 C_v とする。理想気体の準静的な断熱膨張では、圧力を P 、体積を V として、ポアソンの法則 $PV^{C_p/C_v} = A$ 、(A は定数) が成り立つとして、以下の問に答えよ。

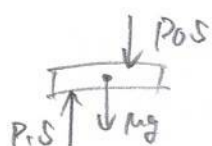
- I. ピストンは円筒内をなめらかに動くことができ、理想気体は漏れないとする。
- (1) 円筒の内側の底面からピストンの底面までの高さが h でピストンが静止しているとき、理想気体の温度と圧力をそれぞれ求めよ。
 - (2) ヒーターで理想気体をある時間だけ加熱してしばらく待つと、理想気体の温度が一定になり、円筒の内側の底面からピストンの底面までの高さが Δh だけ増加してピストンが静止した。このときの理想気体の温度と圧力をそれぞれ求めよ。
 - (3) 問(2)において、理想気体がピストンにした仕事、理想気体の内部エネルギーの変化量、およびヒーターが理想気体に与えた熱量をそれぞれ求めよ。
 - (4) ピストンを静かに押し下げて、円筒の内側の底面からピストンの底面までの高さが、加熱前と同じ高さ h になるまで動かして止めた。このときの理想気体の温度と圧力は問(1)で求めた温度と圧力のそれぞれ何倍か求めよ。
- II. 円筒の内側の底面からピストンの底面までの高さが h でピストンは固定され、理想気体は漏れないとする。
- (5) 円筒内には問(1)で求めた温度と圧力の理想気体が入っているとす。ヒーターで問(3)で求めた熱量と同じ熱量を理想気体を与えてしばらく待つと、理想気体の温度が一定になった。このときの理想気体の温度と圧力の変化量をそれぞれ求めよ。



3.

I

1)



内部の圧力は P_1 である。ピストンが釣り合っている状態である。

$$P_1 S = Mg + P_0 S$$

$$\therefore P_1 = P_0 + \frac{Mg}{S}$$

また、この状態での温度 T_1 である。

$$T_1 = \frac{P_1 S h}{nR} = \left(P_0 + \frac{Mg}{S} \right) \frac{S h}{nR} = (P_0 S + Mg) \frac{h}{nR}$$

(2)

内部の圧力は P_2 である、 P_1 ではない。

$$P_2 = P_0 + \frac{Mg}{S}$$

この状態での温度 T_2 である。

$$T_2 = \frac{P_2 S (h + \Delta h)}{nR} = \left(P_0 + \frac{Mg}{S} \right) \frac{S (h + \Delta h)}{nR} = (P_0 S + Mg) \frac{h + \Delta h}{nR}$$

(3)

仕事 W_{12} 、内部エネルギー変化 ΔU_{12} 、熱量 Q_{12} である、定圧変化なので

$$W_{12} = P_1 S \Delta h = (P_0 S + Mg) \Delta h$$

$$Q_{12} = n C_p (T_2 - T_1)$$

$$= n C_p \left(\left(P_0 + \frac{Mg}{S} \right) \frac{S (h + \Delta h)}{nR} - \left(P_0 + \frac{Mg}{S} \right) \frac{S h}{nR} \right)$$

$$= \frac{C_p}{R} (P_0 S + Mg) (h + \Delta h - h)$$

$$= \frac{C_p (P_0 S + Mg) \Delta h}{R}$$

$$\Delta U_{12} = \frac{C_v (P_0 S + Mg) \Delta h}{R}$$

(4)

温度, 圧力をそれぞれ T_3, P_3 とする。また, $C_p/C_v = \gamma$.

$$P_3 (\delta h)^\gamma = P_2 (S(h+\delta h))^\gamma = P_1 (S(h+\delta h))^\gamma$$

$$\therefore P_3 = \left(\frac{S(h+\delta h)}{\delta h} \right)^\gamma P_1 = \left(\frac{h+\delta h}{h} \right)^\gamma P_1$$

$$\therefore T_3 \text{ 圧力は } \left(\frac{h+\delta h}{h} \right)^\gamma = \left(\frac{h+\delta h}{h} \right)^{\frac{C_p}{C_v}} \text{ 倍}$$

$$P_3 = \frac{nRT_3}{\delta h}, \quad P_1 = \frac{nRT_1}{\delta h}$$

$$\therefore \frac{nRT_3}{\delta h} = \left(\frac{h+\delta h}{h} \right)^\gamma \cdot \frac{nRT_1}{\delta h}$$

$$\therefore T_3 = \left(\frac{h+\delta h}{h} \right)^\gamma T_1 = \left(\frac{h+\delta h}{h} \right)^{\frac{C_p}{C_v}} T_1$$

$$\therefore T_3 \text{ 温度も } \left(\frac{h+\delta h}{h} \right)^{\frac{C_p}{C_v}} \text{ 倍}$$

$$T_3 (\delta h)^{\gamma-1} = T_2 (S(h+\delta h))^{\gamma-1}$$

$$T_3 = \left(\frac{h+\delta h}{h} \right)^{\gamma-1} T_2$$

$$= \left(\frac{h+\delta h}{h} \right)^\gamma \cdot h \cdot \left(P_0 + \frac{Mg}{S} \right) \cdot \frac{S}{hR}$$

(5)

温度, 圧力をそれぞれ T_2', P_2' とする。

定積変化の内部仕事は 0. 熱力学第一法則より

$$nC_v(T_2' - T_1) = Q_{12} = \frac{C_p(P_0 S + Mg) \Delta h}{R}$$

よって, 温度の変化量は

$$T_2' - T_1 = \frac{C_p}{C_v} \cdot \frac{(P_0 S + Mg) \Delta h}{nR}$$

また,

$$T_2' = T_1 + \frac{C_p}{C_v} \cdot \frac{(P_0 S + Mg) \Delta h}{nR}$$

$$P_2' = \frac{T_2'}{T_1} P_1$$

$$\therefore P_2' - P_1 = \left(\frac{T_2'}{T_1} - 1 \right) P_1 = \frac{\frac{C_p}{C_v} \cdot \frac{(P_0 S + Mg) \Delta h}{hR}}{T_1} \cdot P_1$$

$$= \frac{C_p}{C_v} \frac{\Delta h}{h} \left(P_0 + \frac{Mg}{S} \right)$$

よって, 圧力の変化は

$$P_2' - P_1 = \frac{C_p}{C_v} \frac{\Delta h}{h} \left(P_0 + \frac{Mg}{S} \right)$$

$$\frac{\frac{C_p}{C_v} \cdot \frac{(P_0 S + Mg) \Delta h}{hR}}{\frac{(P_0 S + Mg) h}{hR}} = \frac{C_p}{C_v} \frac{\Delta h}{h}$$